



「啓蒙」の意識を持つ通俗小説作家：程小青による『霍桑探案』シリーズの創出

崔，龍

(Citation)

海港都市研究, 9:79-96

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81005493>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005493>



「啓蒙」の意識を持つ通俗小説作家

——程小青による『霍桑探案』シリーズの創出——

崔 龍
(CUI Long)

はじめに

中国における文学の創作は、古代以来多彩で豊かな歴史的伝統に彩られている。小説に限っても、先秦の神話伝説から魏晉南北朝時代の志人及び志怪小説、さらには唐代の伝奇本、宋代の話本、そして明清時代の章回小説に至るまで、これらはいずれも中国文学史上において決して無視できないものである。しかし、それらの中国の多彩な文学的伝統の中に探偵小説は存在しない¹。

1896 年、張坤徳が翻訳した「歇洛克呵爾唔斯筆記」²が上海の『時務報』に掲載され、ここに探偵小説が中国において初めて登場したのである。探偵小説という小説ジャンルは中国に現れると、すぐ人気が広がっていた。徐念慈（ペンネーム：覺我）の統計によると、「それぞれのジャンルの小説の販売数について、他の出版社のことは分からないが、小説林出版社が販売した数から見ると、探偵小説が一番多く、約 70 ～ 80% 占めている」³[徐 1907 : 7]。民国期に入ると、上海は急速に自由化・開放化が進み、文化産業も大いに繁栄した。中国作家の探偵小説創作は、このような背景のもとで、上海の繁栄とともに発展し続けた。当時、探偵小説をメインに掲載した雑誌は前後にわたって十数種あったが、他の新聞や雑誌も時々探偵小説を掲載していたし、『快活』などの通俗文学雑誌は探偵小説特集を刊行したこともある。20 世紀 20 年代から 40 年代末にかけて、程小青、兪天憤、張碧梧、陸澹庵などの探偵小説作家が活躍し、中国における探偵小説の文学史に一ページを画した。兪天憤は中国で初めて探偵小説に作品の内容に応じる写真をいれ、また張碧梧は家庭をめぐる事件に拘る探偵を作り出し、さらに陸澹庵はプロでない探偵・李飛の活躍

1 中国伝統文学には公案小説が存在する。探偵小説と同じく事件を解決することが小説の主題であるが、学界では一般に両者が同じ文学ジャンルとは考えていない。

2 The Adventure of the Crooked Man, The Adventure of the Naval Treaty, A Case of Identity, The Adventure of the Final Problem の計 4 篇ある。

3 小説銷數之類別是也，他肆我不知，即小説林之書計之，記偵探者最佳，約十之七八。

を描いた。程小青は、上海を主な舞台に、探偵霍桑と助手の包朗が活躍して、困難な事件を次々と解決していく姿を描く探偵小説集『霍桑探案』シリーズ⁴を創作した。このシリーズは、形の上では『シャーロック・ホームズ』シリーズの形式、即ち、探偵と助手とが互いに力を合わせる形式を真似て創作した作品であるが、程小青が植民地的色彩の濃い租界社会・上海に生まれ育ったことから、その時代と場所からこの時期の上海における烙印を受けていて、独自の特徴を持っていると考えられる。まさに、程小青自身が語ったように、小説の主人公霍桑は「科学的な思想と態度を持ち、理智と正義を大切にする、敬慕に値する新たな中国探偵」⁵[程 1933]として形象化されている。『霍桑探案』シリーズは当時大変人気があり、雑誌や新聞で発表されただけではなく、単行本や選集なども出版された。程小青は探偵小説の理論研究を行い、探偵小説に関する論文を発表しただけでなく、中国で最初に探偵小説史を書いた人でもあった。そうしたことから、程小青と『霍桑探案』シリーズは民国期を代表する探偵小説作家と作品であったと言えるであろう。

民国時期における探偵小説の創作は盛んであったが、現在に至るまでそれに対する系統的な文学研究は殆どなされてこなかったと言える。范伯群が主編した『中国近現代通俗文学史』の緒論によると、いままで中国近現代文学史は半分だけ、つまり「純」文学だけの研究が行われ探偵小説や恋愛小説及び武俠小説などの「俗」文学は疎かにされてきた⁶。しかし、20世紀における中国の都市文化を考える上で、探偵小説を含める「俗」文学を如何に再評価するかは避けて通れないテーマであると考えられる。また、具体的な探偵小説作家と作品について、研究は更に不足だと言える。程小青を例としてみると、彼と彼の『霍桑探案』シリーズに関する先行研究ですら寥々たるもので、主な著書は姜維楓の『近現代探偵小説作家程小青研究』のみである。しかも、この本は、作品自体の鑑賞に重点を置いている。しかし、筆者の考えでは、程小青の探偵小説の成功は、主に文学作品として優れているのではなく、彼が通俗小説作家として読者の興味に応じて作品を創作すると同時に、探偵小説に「啓蒙」の機能を与えたためである。周知のように、五四新文化運動で誕生した新文学は、文学を一つの手段として社会を救おうとし、文学の「啓蒙」の機能を強調する傾向が強かったものである。一方で、通俗文学は政治や社会改革への関心を持たず、市民階層を中心とする読者の興味と好みにひたすら迎合しようとしたものだと思われる。だが、程小青は特別な存在であった。彼は探偵小説という通俗文学スタイルで創作を

4 1918年から1949年まで程小青が書いた探偵霍桑を主人公としての一系列の小説。

5 值得敬仰的有科學思想和態度，重理智持正義的嶄新中國偵探。

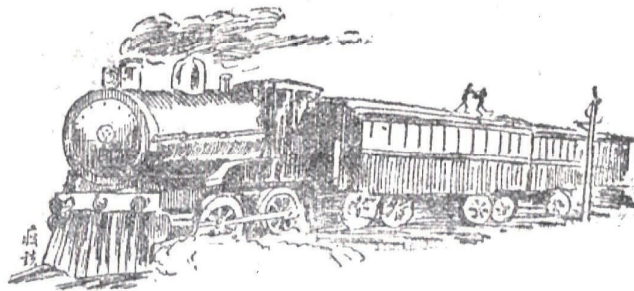
6 范伯群主編『中国近現代通俗文学史』（江蘇教育出版社、1999年）第1頁を参照。

行ったが、社会問題などに対するその考え方は新文学の提唱した「啓蒙」と重なる部分がある。彼の作品に人気があった原因を、単に西洋から引き入れた新たなスタイルと込み入ったプロットにあったと解釈するのはできない。なぜなら、当時他の中国探偵小説もこの二点を備えていたためである。程小青が当時最も人気がある小説作家の一人になった原因は、彼が真剣に社会問題などを思考していたことにある。また当時の読者もこのような啓蒙思想を持つ探偵小説が新鮮だと期待していた。この点について、今までの研究ではほとんど言及されなかった。

それ故、本稿は『霍桑探案』シリーズを素材とし、同時期における他の中国探偵小説作家が創作した作品と比較し、程小青が通俗小説の伝統を継承し読者の需要に迎合しつつも、探偵小説に「啓蒙」の機能を与えたことに注目し、概ね次の三点に問題を集約して述べてみたい。

Ⅰ 自ら挿絵を描き小説の中に生かす

古来より、文学作品に図や挿絵を付ける方法は、世界の他地域に普遍的に見られるように、中国の文学的伝統の中にも確かに存在した。20世紀に入って、上海などの近代都市における出版業の発達により、新聞と雑誌の種類は500を超え、特に20世紀の初めから30年代までに出版されたもののうち、鴛鴦蝴蝶派⁷(探偵小説は鴛鴦蝴蝶派に属すると見られる)に関する雑誌や新聞などは180もあった[張 1985: 245]。読者の目を引くための一つの手段として、通俗文学作品を掲載する雑誌や新聞で挿絵などが多用されるケースが多くなってきた。探偵小説も例外ではない。まずは下の挿絵を見よう。



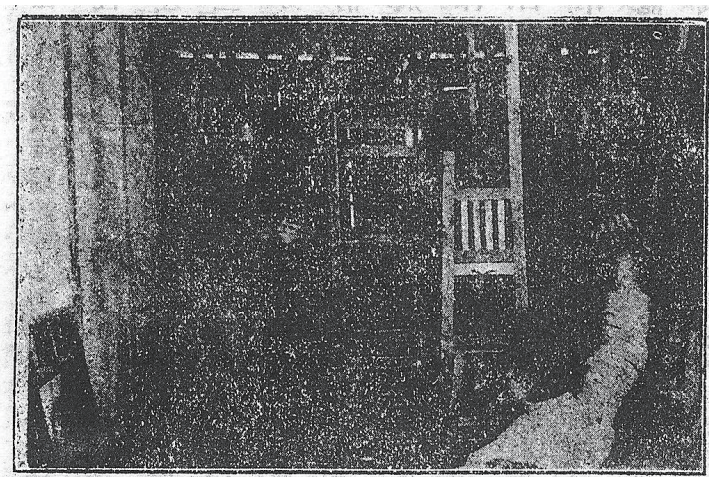
(本挿絵は『偵探世界』1923年1期陸澹庵の「隔窓人面」に付けられた挿絵である。)

この挿絵は『偵探世界』(1923年第一期)に掲載された陸澹庵の「隔窓人面」に載せ

⁷ 鴛鴦蝴蝶派: 1918年4月19日、周作人が北京大学で行った講演の中で初めて提示された概念である。主な読者は一般市民で、その内容大部分は恋愛小説である。

られた挿絵であり、走っている汽車の上で闘う二人の姿を描いたものである。しかし、小説では汽車に関する描写は一切ない。この挿絵はある程度読者の想像を引き起こすかもしれないが、小説の内容と完全には符合せず、ストーリーの展開にとって不可欠なものではない。当時の雑誌に載せた探偵小説において、ほとんどこのような形式の挿絵が使われていた。小説の内容と少し関わるものもあれば、内容と完全に無関係なものもある。

最初に挿絵の革新を行った探偵小説作家は兪天憤である。彼の考えでは、当時映画が流行っている原因は表情と動作のおかげなので、この方法を挿絵に活用すれば、同じく探偵小説の表現力を増やすことができる。それで、彼はプロの俳優とカメラマンを雇って、小説の中の重要なシーンの写真を撮り、これを挿絵として使った。例えば、彼は「白巾禍」⁸という小説の中で次の写真を挿絵として使った。



(本挿絵は1926年『紅玫瑰』第二巻30期「白巾禍」17頁に付けられたものである。)

しかし、上図の示すように、当時の撮影と印刷技術からの制約により、実際に雑誌に載せられた写真はぼんやりして輪郭が不鮮明ではっきり見えない。兪天憤自身もこの弱点に気づき、また写真を撮るコストが高すぎたこともあって、僅かに二、三篇だけで彼は作品に写真を付けることを中止したのである。

兪天憤の他に、程小青だけは探偵小説の挿絵を革新しようとした。彼は読者のために、小説のプロットに応じて自ら挿絵を描いた。『霍桑探案』シリーズに付けられた挿絵は、概ね以下の二種類に分類することができる。

8 兪天憤「白巾禍」『紅玫瑰』2 (29) (1926年)。

1 地図と平面図

当時の中国探偵小説が誕生初期にあたり、読者の目を引いて、更に読者に受容されることは、探偵小説作家にとって切実な課題である。探偵小説には事件現場とその周辺の空間についての描写が数多く見られる。しかし、文字で空間を分かりやすく表現することは作者にとって容易なことではない。作者が表現したい場面の描写について、もし作者の設定と読者の想像の間にはズレが生じれば、読者にとってプロットが理解し難い可能性があり、さらに探偵小説に興味を失う可能性もある。このような状況を免れるために、程小青は複雑な場面に対して、専らに地図や平面図を描き挿絵として小説に付けて、読者に閲読の便利を提供しようとした。例えば、「舞後的帰宿」⁹という小説の中では、事件発生場所及び死亡現場に対する描写、物品への調査、探偵と警察の会話などを交互に描写し、この部分だけで何千文字にも及ぶ。霍桑が事件現場に到着した後、作者は次のように書いた。

この建物は独立した一戸建てで、正門が青蒲路に向かい、南向きで、東側は大同路の角に隣接し、西側は小さな空き地になっている¹⁰ [程 1942 : 13]。

霍桑が正門に入り、両側の様子を見て、迎えに来た警察と会話してから、次の描写が続く。

屋敷の入り口には二三枚の古い木の板が敷いてあり、それは左手に開いているドアの奥に伸びていて、板の下にある足跡を保護している¹¹ [程 1942 : 14]。

霍桑と助手は足跡を細かく調査し、少し議論した後、二人は屍体のある部屋に入ってしまった。

恐怖の光景の真ん中にあったのは、もちろん被害を受けたもののダンサークイーンの王麗蘭だ。彼女は窓辺のデスクの前にある背が真っ直ぐな椅子に座っている。彼女の体は窓に向いているが、頭は椅子の裏面まで仰向いている¹² [程 1942 : 15]。

その後、二人は死者の傷痕などについて詳しく調査を行ったが、その結果について作者

9 程小青『霍桑探案袖珍叢刊（七）』（世界書局、1942年）。

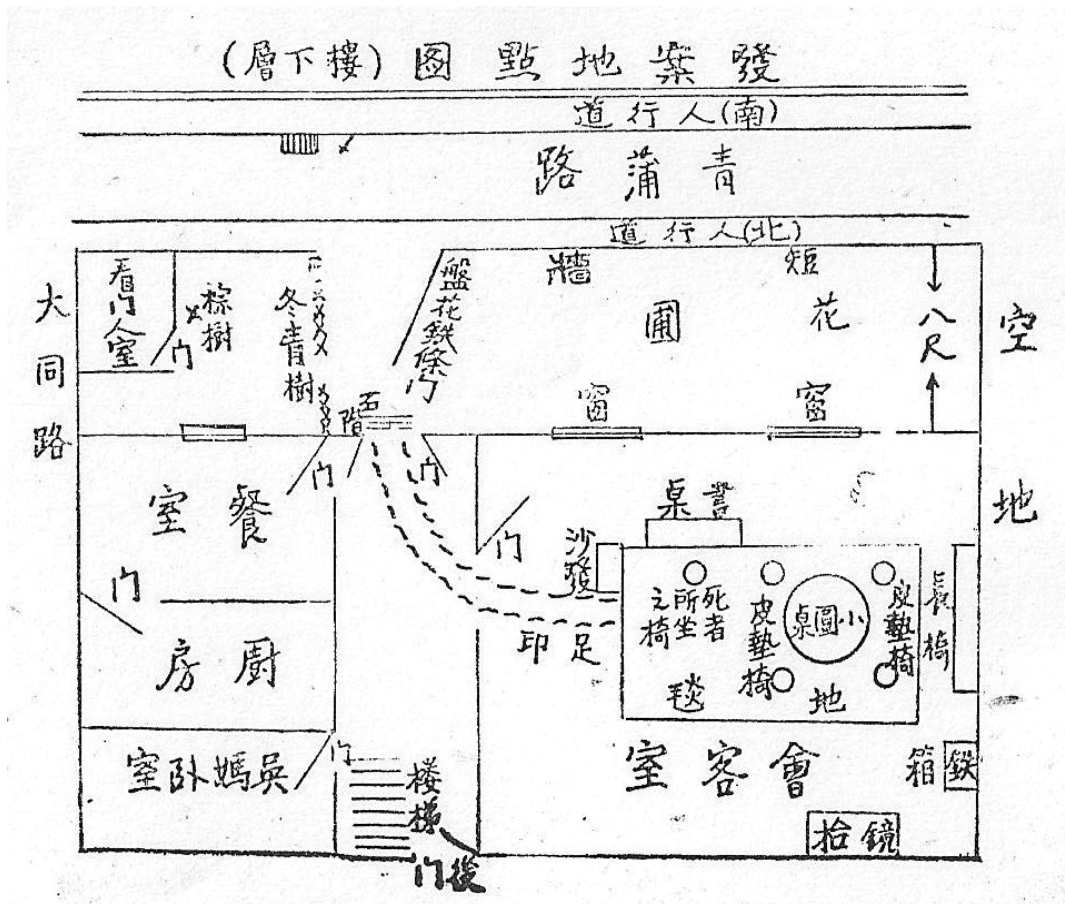
10 這屋子是孤立的，門面向青蒲路，是朝南的，東側臨大同路的轉角，西邊是一小方空地。

11 那正門口鋪著兩三塊舊木板，轉接到左手裡一個開著的門口裡去，掩護著木板下面的足印。

12 那慘怖景狀的中心點，自然是那被害的退職舞後王麗蘭。伊正坐在靠窗的書桌面前的一張直背皮墊椅上。

は千文字ぐらいで描写を書いた。また、霍桑が現場で一つの鍵を見つけたことがきっかけで、部屋にある家具などの方位についての説明と証人への尋問などの内容が引き出された。

以上のような書き方により、足跡と傷痕に重点的に注目し、分散する事件現場への描写に対し関心が不足する読者がいるのであろう。たとえすべての現場描写に注目する読者であっても、引用文のような描写を通して、頭ではっきり事件現場の方位図を想像するのは容易なことではない。そのため、作者は自ら事件現場の平面図を描き、挿絵として小説の中に入れた。下図のようである [程 1942 : 13]。



(本挿絵は 1942 年世界書局が出版した『霍桑探案袖珍叢刊 (七)』の「舞後的帰宿」13 頁に付けられたものである。)

これは事件現場の平面図と事件現場付近の地図を合わせた挿絵である。この挿絵によって、どの読者も最初から事件現場の建物と部屋の配置、及び建物周囲の道路状況などについて、明確に把握できる。しかも、この挿絵の後に展開する数万字にも及ぶ物語の中で、何度もこの挿絵と関わるプロットが出現した。例えばある道に疑わしい車が止まったり、

ある道に不審者が現れたり、窓の方位と死者の姿からある推理を得たりするなど、関連する表現が現れる度に、読者の関心を繰り返しこの挿絵に引き戻す役割を果たしている。つまり、この挿絵があるからこそ、読者はその部分を読む際に障害なく個々の具体的な状況を理解し把握することができる。

2 「呪文」などの道具に関する挿絵

小説の内容によって、文字ではうまく説明できないことがある。特に絵についての説明は極めて困難である。例えば、どれほど優れた作家でも、名画『モナ・リザ』の素晴らしさを文字表現によって読者に伝えることは到底不可能であろう。程小青は絵を文字で表すことを避け、直接挿絵で示す手法を採用した。例として、「催命符」¹³という作品の中に登場する、紙に書かれた二枚の「呪文」について見てみよう。その二枚目の「呪文」について、程小青は文字で以下のように表現している。



図1
[程 1942 : 41]

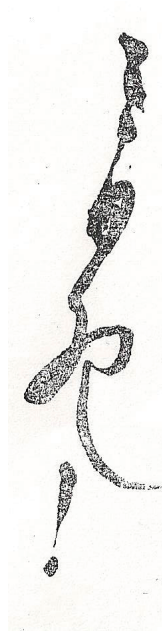


図2
[程 1942 : 61]

(以上二つの挿絵はそれぞれ1942年世界書局が出版した『霍桑探案袖珍叢刊(九)』の「催命符」41頁と61頁に付けられたものである。)

13 程小青『霍桑探案袖珍叢刊(九)』(世界書局、1942年)。

霍桑は（図2について）「これは明らかなことだ。上の三つの点はきっと『三』という文字だ。つまり『三日死』の三文字だ。下の新しい句読点は感嘆符『！』だ。この前に我々はその剣形（筆者注：図1）のような豎と点は感嘆符に違いないと仮説を立てたが、今やっと証明できた。」と解釈した¹⁴ [程 1942：61]。

上の文を読んでも、具体的なイメージが湧かず、「呪文」が如何なるものか想像することは極めて難しい。そこで程小青は図のような挿絵を描いてみることにした。それを見ると、読者はすぐに「呪文」のことがわかるのであろう。

以上から分かるように、明清以来の繡像小説などの通俗文学作品は挿絵を使う伝統があり、程小青もそれを継承した。しかし、繡像小説や当時の中国における他の探偵小説作家の作品で使われた挿絵は、主に読者の興味をかきたてるためのものであり、小説にとって不可欠な部分ではない。程小青はそれまで中国ではプロットが複雑な探偵小説がなかったため、読者の受容性を考慮した上で、自ら挿絵を描いた。それらの挿絵は小説のプロットに応じ、ある程度小説の一部分となったと言える。つまり、程小青の挿絵は学歴が決して高いとは言えない当時の読者層にとって、作品をさらに一層分かり易く理解するための手段の一つになったと筆者は考える。

もちろん、程小青は通俗小説作家の一人として、主に市民階層で受け取られたが、通俗小説作家である以上、一方的に読者の好みに迎合するだけだと考えるならば、それは間違いである。注意すべきなのは、程小青が社会に対する深刻な考えを常に小説の中に入れ、新文学者のように啓蒙するケースが多く見られることである。次はこの点について分析を展開したい。

II 強く盛んな「憂患意識」

古代以来、中国の文人たちは、強烈な愛国心と「天下の憂いに先立って憂える」¹⁵という憂国の政治思想を持っていたとされる。戦国時代の屈原、唐代の杜甫、宋代の范仲淹、民国の魯迅などの文人たちは、いずれも文字を通じて、その時代における国家・社会への「憂患意識」を文学の中に表現することに精力を注いだのである。程小青も『霍桑探案』シ

14 霍桑解釋道：“這是很明顯的，上面三點定是個‘三’字，就是‘三日死’三字，下面是新標點的驚嘆號‘！’我們上一次假定那劍形的一豎一點是歎聲號，現在可以證明了。”

15 先天下之憂而憂

リーズを通して、当時の中国社会に広く存在した社会問題への彼なりの「憂患意識」を明らかにしたと言える。欧米の探偵小説では多少社会背景と関連するが、実際に小説の登場人物の口を借りて社会問題を批判することは僅少である。しかし、『霍桑探案』シリーズで、程小青は霍桑と包朗の口を通じて、当時の上海で多くの人々が直面していた教育、婚姻、賭博、司法などの社会問題に強い関心を表明した。しかも、程小青はそれぞれの社会問題に対し批判するだけでなく、その原因についても分析して、更に解決方法を探し求めた。この点は、単なる欧米探偵小説と異なるだけでなく、他の中国探偵小説とも異なるところである。ここでは、社会問題の中でも最も深刻な司法問題を例として分析を展開したい。

清代までの中国は法治ではなく、人治に基づく社会であった。民国期に入って、行政、立法、司法という三権分立の思想が登場したが、実際の状況から見ると、古代中国と大差なく、特に地方においては、依然として古代からの影響が強く、司法の平等性や正確性などはまだまだ程遠いことであった。具体的に言えば、司法の闇は主に裁判官が収賄し法を曲げることと警察の無能という二つ方面に体现する。前者について、『民国司法黒幕』¹⁶は民国時期の裁判官や弁護士などの不法な状況、特に裁判官が賄賂を受けて、事実を曲げている状況を暴露した。例えば、梁仁傑は1930年江西省高等裁判所裁判長を務めた時、誕生日祝いという名目だけで3,000万元もの賄賂を受け取った[張1997:38]。後者に関しては、『上海警察, 1927-1937』¹⁷が、20年代から30年代までの上海警察の実情を纏めた。例として、30年代初めのころ、専門知識を持つ警察の数はわずか五分の一にすぎず、当時の警察はよく金品をゆすったり、私利を貪ったり、犯罪者と関わったりしたという[Wakeman 2004:51]。また、文学作品でも司法の闇に関する描写がよく見られる¹⁸。探偵小説では探偵が事件捜査を担当する役割で、警察の仕事とほとんど重なっているため、中国の探偵小説で描かれた司法問題は警察に集中し、裁判官に関するものは少ない。

筆者の管見の限り、程小青以外の中国探偵小説作家は司法問題について小説の中で主に三種類の扱い方を示した。

第一は、基本的に司法に対し無関心なタイプである。陸澹庵の作品はその典型的な例で

16 張慶軍 『民国司法黒幕』(江蘇古籍出版社1997年)。

17 Frederic Wakeman, Jr. 著 章紅、陳雁、金燕、張曉陽訳 『上海警察, 1927-1937』(上海古籍出版社2004年)。

18 例として、孫玉声が1918年から1919年にかけて発表した『黒幕中之黒幕』を挙げることができる。この小説の中で被告は何度濡衣だと呼んでも裁判官に無視され、結局作り上げられた偽証で有罪だと判決を受けた。

ある。彼が創作した探偵小説は主に金銭関係をめぐって展開し、人が金銭のために自尊心や良心を失った悲劇の描写がよく見られる。事件の背景は学校や家庭といった狭い範囲に限られており、ほとんど司法問題に触れることはない。

第二は、警察の無能を通して探偵の賢明さを引き立てるタイプである。例えば、俞天憤は時の政治に関心を持ち、小説にもたまに司法の闇に関する描写がある。「玫瑰女郎」¹⁹では、パトロール中の汪警部が薔薇を売る女性と夢中になって雑談し、自分の財布が盗まれたことにも気付かなかった。最後に、探偵のおかげで事件が解決され、財布も見つかった。このような例がいくつかあり、いずれも警察は犯人に気付かず、一方、同じく事件解決の任務を担う探偵は順調に事件を解決したのである。つまり、作者が警察の無能を描写する目的はあくまで探偵の賢明を引き立てることで、司法問題を批判する主観的な意図はなく、突っ込んだ議論もなかった。趙苕狂の作品もこのタイプだと言える。

第三は、犯罪の手段で司法に対抗する主人公を称揚するタイプである。代表的な作家は孫了紅である。彼は俠盗の物語を描いた。主人公魯平は窃盗する時にあった事件に興味があり、探偵として次々と事件を解決する。彼は社会秩序への破壊者、且つ国家法律への反逆者であり、犯罪の手段を用いて司法の不正に対抗する。しかし、彼は義侠心を持ってよく貧乏な庶民を助け、法理以外の情理に基づいて行動する。孫了紅は探偵小説作家だと言われるが、学界では彼の作品を一般に「探偵小説に反する探偵小説」だと呼んでいる。

以上三つのタイプの作者と違い、「憂患意識」を持つ程小青は作品の中で司法の闇に対し深刻に批判を展開した。しかも彼は問題を解決する方案を提出し、司法の現状を改善しようと民衆に呼びかけた。彼が提案した解決方法は魯平のような犯罪の手段によって司法の闇に対抗することではなく、当時の法律体系を尊重し維持しつつ、法秩序の範囲内の合法的手段を以て被害者と犯罪者にそれぞれ対応を与え、司法問題を改善する道を探求している。例えば、「嗣子之死」²⁰という小説の中には以下の会話が出てくる。

（霍桑）「恵傑はこの毒薬で死亡したのか？それはまだ証明されていないのに、勝手に志蕚を捕まえるなんて、乱暴すぎるだろう。」

私（包朗）も溜息をついて、「これは警察の常套手段だ、彼らは誰かを捕まえようと決心すると、自由勝手に捕まえてしまう。例え間違っているとしても何の責任も取らない。」と言った。

19 俞天憤「玫瑰女郎」『紅玫瑰』1（16）、1924年。

20 程小青「嗣子之死」『霍桑探案袖珍叢刊（二十五）』（世界書局、1945年）。

一口の煙草の煙を吐いて霍桑は、「彼らこそ我々が努力すべき対象だ。公務員がこのように法律を愚弄することを許すなんて、決してこのまま続けさせはしない。」と言った²¹ [程 1997 : (6) 111]。

この小説では、旧態依然たる警察の代表として蔡長福はコップに残っていた黒い水を検査せずに、勝手にそれを毒薬（実はただの濃いお茶に過ぎなかった）だと判断し、韓志勳を犯人として逮捕した。霍桑はこの件について心底から怒って、警察が法律を愚弄するのに対し、それを甘やかすべきでないと批判した。こんな状況を改善する方法について、「彼らこそ我々が努力すべき対象だ」という文章から分かるように、霍桑は司法以外に解決する方法を求めるのではなく、警察を教育するべきだと主張した。彼の考えでは、司法において乱暴な処置が横行する根源は、一部の警察が旧式なやり方から影響を受け、厳密な調査方法を理解していないからである。一旦警察が正しい調査方法を学ぶことが出来れば、十分に改善する可能性がある。この事件の結果も、霍桑が蔡長福に黒い水の正体を教えた後、蔡が自分のやり方が軽率だったと認めた。

汪銀林という警察もよく霍桑から事件捜査を助けてもらう。「彼は霍桑と知り合ってから、今までの陋習がかなり減り、観察と思想の面でも明確な進歩がある」²² [程 1997 : (4) 146]。その他に、しばしば出場する倪金寿も霍桑の影響を受けた警察の一人である。

また、複数の作品から分かるように、『霍桑探案』シリーズは上述した第二のタイプのように警察のイメージをけなす方法により探偵の魅力を持ち上げることがをしない。探偵と警察は緊張感が漂う対立関係ではなく、むしろ程小青の構想では両者がよく協力しあう関係を持っている。探偵は警察への教育を通して彼らの素質を向上させ、そしてこういう改良の方式を以て司法の闇を改善しようとする。即ち、程小青は司法の暗闇の中で、希望の火を見出して、司法制度の改善と公平性の確保を強く望んでいたのである。正しく霍桑のような探偵こそはこのような役割を担った人だったのである。

なお、注意すべきなのは、『霍桑探案』シリーズの中で、多くの小説の始まりあるいは

21 （霍桑）“惠杰的死是不是就因着这毒药致命？这要点都还没有证明，他便贸然将人捕去。你说这不是胡闹是什么？”

我也不禁叹气说：“这原是侦探们的惯技！他们高兴要抓一个人，就随便抓一个进去玩玩，抓错了也绝对不负什么责任。”

霍桑喷出了一口烟，说“这就是我们努力的对象。这种公务员随便玩法的现象，我们决不能让它延续下去！”

22 他自从和霍桑交识以来，不但把素来的习气减少了许多，就是在观察和思想方面，也有不少进步。

終わりのところで、霍桑と助手の包朗が意味深い会話をするのである。その内容は前の引用文のように、事件で暴露した各種の社会問題についての議論である。このような「国を憂い、民を憂う」気持ち、及び会話の中で表現する社会問題に対する批判と読者への教育や呼びかけは、『霍桑探案』シリーズに新文学が提唱する「啓蒙」の機能を与えたと言える。つまり、程小青が社会に対する「憂患意識」と探偵小説を有機的に結合したという点については、彼を他の中国探偵小説作家と区別する特徴の一つであり、また彼が民国時代の最も人気がある中国探偵小説作家になった理由の一つであろう。

III 青少年への教育

青少年は国の未来である。清末から民国期にかけて、社会が激しく移り変わるとともに、数多くの知識人は青少年への教育に心血を注いだ。例えば、梁啓超は「少年に智があれば則ち国に智があり、少年が豊かになれば則ち国は豊かになり、少年が強くなれば国は強くなれる」²³ [梁 1900] という有名な文章を書いた。程小青も国の未来のために青少年の教育に力を入れるべきだと考えた。それに対して、当時の他の中国探偵小説作家は青少年を教育することを意識的に作品に持ち込むことはほとんどなかった。

当時の上海は様々な矛盾に満ちた都市であった。1842年に植民地化して以来、上海は中国で工業が最も発達した都市の一つとなった。また、欧米の近現代思想も積極的に広がって、1919年に陳独秀は上海の雑誌『新青年』で「徳先生（民主）」と「賽先生（科学）」を学ぶべきだと主張した²⁴。一方、上海は堕落した一面もあった。当時の上海は魔都²⁵と呼ばれ、賭博、ダンスホール、麻薬など人を誘惑するものに満ち溢れていた。程小青は時代の流れを鋭く意識したので、探偵小説を通して、一方では青少年が科学に対する興味を引き起こそうとし、一方では青少年を様々な誘惑から離るようと勧めることに力を尽くした。

かつてないほどに科学の進歩を追い求める社会背景で、程小青は「探偵小説は化粧した教科書」だと指摘し、小説の中で様々な科学知識を伝授した²⁶。そして、彼はすべての読者の中で、青少年こそは好奇心が旺盛で、新しい物事を受け入れやすく、最も教育的価値

23 少年智則國智，少年富則國富，少年強則國強。

24 陳独秀の「本誌罪案之答弁書」（『新青年』6（1）1919年）を参照。

25 「魔都」という上海についての表現は、1923年に村松梢風が上海を描いた作品『魔都』で初めて使用されたものである。

26 程小青の「從偵探小説説起」（『文匯報』1957年5月21日）を参照。

があるので、科学教育の重点を青少年に置くべきであると考えた²⁷。彼の青少年への教育方法は単なる説教ではなく、科学知識を物語の展開過程に巧妙に融合させ、自然に彼らの興味を引き起こすところにあった。例えば「血手印」という小説の中で、以下のような描写がある。

（崔警部は凶器だと思われるナイフの検査を霍桑に依頼した。そして、霍桑と助手の包朗はこのナイフについて次のような議論をした）

（霍桑）「君はどう思うか。」

（包朗）「ああ、血痕みたいだね。」

「血痕みたい？」

「ええ、血痕だと確信する」

「ほほ、君も血痕だと思うのか。（中略）ナイフにジュースが付いて乾いたら、同じようにこんな色に変わる。なぜなら人間の血液にもオレンジジュースのように酸の成分があるからだ。酸と鉄が接触したら、同じ酸性塩に変わり、乾いた後の色も同じだ。目だけでは決して区別できない。」

「そうしたら、どのような方法で区別するのか。それとも顕微鏡を使うのか。」

「いや、一つの簡単な方法がある。薄いアンモニア液をしみに垂らして、5分間過ぎたら分かる。もしジュースの場合、しみには緑色が出る。血痕だったら、色は変わらない。」²⁸ [程 1997 (6) : 415-416]

こうした程小青の科学知識に裏付けられた描写に対して、他の作家の探偵小説で、血痕の調査に関する描写は少ない。対比として、陸澹庵の「古塔孤囚」²⁹をみよう。探偵李飛

27 「灰衣人」（程小青「灰衣人」『霍桑探案外集』大衆書局、1932年）などの小説を参照。

28 “你有什么见解？”

“唉！像是血渍啊！”

“唔，像是？”

“不，我相信确是血渍。”

“喔，你也以为是血渍？……有时候刀上沾染了果汁，一经干透了，也会得变成这种颜色。因为人类的血液里也和桔类等果汁一般，含着些儿酸的成分，酸和铁质接触了，都能变成一种鉄柠酸盐，干了以后的颜色是彼此相同的。若是单凭肉眼的能力，决不能分别出来。”

“那末你可知道怎么样分别？可是用显微镜？”

“不是。有一种方法很简便，只需用一种淡亚马尼亚液，滴在斑渍上面，五分钟后便能明白。若是果汁所染，斑点会上泛出绿色，倘然是血渍，那是不会变色的。”

29 陸澹庵 1923 年「古塔孤囚」『紅雜誌』2 (65)。

が洞窟に付着した赤い跡を見つけたことについて、以下の如く、陸澹庵は簡単な記述で済ませている。

(李飛)「私は洞窟で闘いの痕跡を見つけ、石の壁に血痕と手印を見た。秦建平は洞窟で犯人に打たれ怪我をしたのだろう。」³⁰ [陸 1923 (65) : 6]

両者を比べれば、程小青の苦心の程がわかる。他の作者のように血痕の検査について上のように詳しく書かなくても、物語の進行には何の影響もない。しかし、そのような描写がないと、読者にとっては、科学捜査の方法への理解が欠けるし、興味が出ることもほぼ不可能である。程小青は正にこのように、知らぬうちに読者、取り分け青少年の読者に科学知識を普及させた。『霍桑探案』シリーズでは血痕だけでなく、髪や指紋などに対する科学捜査に関する描写もたくさんあり、いずれも青少年への科学教育のよい教材になったのである。

科学教育以外に、程小青は青少年の精神世界の充実と成長にも関心を持っていた。当時の青少年にとって、封建的な教条や束縛に満ちた世界は徐々に打ち破られ、彼らの前には各種の誘惑に溢れた新世界が現れた。「自由」という名義のもとで、如何なる生活様式を選ぼうとも、それは当たり前のことになったようだ。当時の現状に対し、他の探偵小説作家は関心を持たなかったが、程小青だけは『霍桑探案』シリーズの「白衣怪」³¹、「矛盾圈」³²などの作品で、青少年の多様な生活様式について多くの描写をしている。青少年が賭博に惑溺し自力で抜け出すことができなくなったり、知識階級に属すエリートの大学生がダンスが出来てダンサーと恋に落ち、他人とそのダンサーを張りあって恋人を拳銃で打ったり、男の大学生が買春に夢中になったり、女の大学生が金銭のために売春したりした。以上のような生活様式に対し、小説の中で、探偵霍桑と助手包朗は、それを「嚴重に注意を喚起すべき問題」³³ [程 1997 (4) : 125] として「墮落」した生活様式だと痛烈に批判した。「輪痕与血跡」という物語の中で、霍桑は青少年の前途への配慮を表わし、大人の責任について次のように話した。

30 “我查得那窟中有一種戰鬥的痕跡，兩旁石壁之上還有血跡和手印，可見得秦建平被凶手打傷是在石窟。”

31 程小青「白衣怪」『霍桑探案外集』（大衆書局、1932年）。

32 程小青「矛盾圈」『霍桑探案袖珍叢刊（十）』（世界書局、1942年）。

33 这个问题有严重注意的价值

（霍桑）「どんなことをするにしても、そこには一つの専門と言うものがあって、社会と国家に貢献したり、人々に恩恵をもたらすことができれば、それは全て成功だと言える。今まで、一般人は官吏あるいは富豪になるのが成功と考えていたが、それは何千年も続く古い観念で、このような考え方では若者は志気を失ってしまう。我々のような理智や志のある大人は、出来るだけ若者の考えを是正してやらなければならない。」³⁴ [程 1997 (5) : 467]

霍桑と包朗が率直に語ったのは実は作者の程小青自らの心の声である。複数の作品³⁵ から分かるように、当時社会に存在する青少年のダンスや賭博などの行為に対し、程小青はそれを「風流香艶」や「自由自在」だと評価する人が多くいるはずだと認識しているが、それらの行為が青少年を堕落に導くと思っているので、霍桑の口を借りてそれを評判した。青少年は国家の命脈で民族の基石であり、彼らが一旦岐路に入ったら、誰かが彼らを覚醒させなければならない。そこで、程小青は探偵小説を手段として青少年を「啓蒙」しようとし、青少年が時代に適合した新たな人生の目標を樹立すべきだと呼びかけた。彼の考えでは、青少年が自らの力を以て国家と社会に貢献し、何でもいいから社会に有用な一芸に秀でることを追求すべきである。

筆者の管見の限り、探偵小説の作者が作品で自分の考え方や価値観などを流露することは珍しくないが、程小青のように小説で直接に青少年に存在する各種の生活様式に対し価値判断を行うことは珍しい。どの時代においても、社会では人生の理想や価値観が一つしかないとは言えない。それにしても程小青が青少年の思想教育において多くの精力を投入していた原因は、おそらく彼が中学校や高校の教師を長年に務めたことと関わりがあるのであろう。彼が教鞭を執る経歴によって、青少年の实际情况に対しより一層了解していた。それ故、当時の時代背景と社会背景で、青少年が容易に自我を迷うことを認識した程小青は作品で青少年が生活態度を向上すべきだと何度も繰り返した。

以上のように、程小青は探偵小説に青少年を教育する「啓蒙」の機能を与え、『霍桑探案』シリーズで意識的に科学と思想教育を取り入れた。この点について、当時において積極的な意義があり、一部分の青少年を科学の道に導くことができるかもしれないし、一部分の

34 （霍桑）“无论干什么事情，只须有一种专长，能够服务社会国家，和裨益人群，都是成功！已往，一般人都把做官发财算为成功，那是几千年来传统的腐化观念，最足戕青年的志气。我们自认有理智有志向的人，都应当尽力纠正的。”

35 前掲「白衣怪」、「輪痕与血跡」、「舞後的帰宿」などの小説の他に、前掲「從偵探小説説起」という論文を参照。

迷える青少年に人生の方向を示したかもしれない。しかし一方で、探偵小説は所詮論文ではないので、強烈すぎる主観的な意見は違う意見を持つ読者にとってはある程度興ざめなものであり、多くの議論もプロットの展開に悪影響を及ぼすことも免れないだろう。

終わりに

程小青の『霍桑探案』シリーズは、斬新な文学ジャンルだった中国探偵小説の誕生初期に書かれたものであり、作者本人も模索しながら創作していたことである。更に、程小青は小説で意識的に社会問題への批判や青少年への教育などの「啓蒙」的要素を注入したので、それが小説のリズムや緊張感に影響を与えることは避けがたかった。例えば、Ⅲの部分で言及した血痕に対する描写によって、青少年の科学への興味を引き出すことはできるが、本来事件現場の描写に集中したい読者は科学への描写がつまらないと思ったかもしれない。また、血痕を検査する方法の描写がプロットの進行に不良な影響を与えたと感じる読者もいるはずである。それ故、文学の審美的機能から言うと、程小青の『霍桑探案』シリーズは民国時期の中国探偵小説群の中で抜きん出た作品だと言えるが、欧米の探偵文学作品と差があることは否定できないのであろう。ただ、『霍桑探案』シリーズの文学価値はともかく、注意すべきなのは、程小青の探偵小説は我々に民国時代における市民文化³⁶を観察するための典型的な手本を提供したことである。

程小青の探偵小説には、同時期における他の中国探偵小説とは異なる三つの特徴があらわれていた。第一に、程小青は作者として自ら地図や道具などの挿絵を描き、『霍桑探案』シリーズの中に生かした点である。それにより、読者は速やかに事件現場の配置などを把握し、抽象的な道具などに対し具体的な印象を得ることができる。第二に、霍桑は「憂患意識」が盛んな愛国の探偵として、当時社会に存在した各種の問題に対して深い関心を持ち、それを批判する上で積極的に解決方法を探し求めた点である。第三に、『霍桑探案』シリーズに青少年の科学興味の育成と思想への教育を入れた点である。挿絵の運用によって小説をわかりやすくし、読者に閲読の便利を与えたのは、程小青が通俗小説作家として行った試みの一つである。また、彼が探偵小説に「憂患意識」や青少年への教育を結びつ

36 中国の市民文化は概ね都市住民の生活方式と文化だと言える。古代中国において、都市の庶民階級は士大夫階級と違い、独特の文化を持っていた。民国時期に入り、北京や上海を代表とする都市の一般民衆の市民文化も、当時のエリート階級のエリート文化と区別がある。また、中国における都市の発展過程は欧米と違うので、中国の市民文化を欧米の市民文化と同一視することはできない。例えば、中国の市民文化では議会や市民広場などの要素がほとんど存在しない。

けることを通して『霍桑探案』シリーズに「啓蒙」の機能を与えたのは、新文学の趣旨と重ねると言える。これにより、程小青が「啓蒙」の意識を持つ通俗小説作家として、民国時期における市民文化を観察するよい切口になったと筆者は考える。

清末民初は時代が交替する時期にあたり、民衆の教育レベルは普遍的に低く、多数の読者は理解し難い専門的な論文を読めず、政治の時評を完全に理解できなかった。それに対し、小説の言葉使いはわかりやすく、物語のプロットも大衆向きなので、多くの読者はそれを受け入れた。それ故、梁啓超は「論小説与群治之關係」³⁷という文で、「国の民を新たにするには、先に国の小説を新たにしなければならない」³⁸ [梁 1902:1] と言った。彼が提唱した「小説界革命」は大きな効果が見えなかった一方で、鴛鴦蝴蝶派を代表とする読者の需要に迎合する通俗小説は、依然として天下を統一していたと言える。五四新文化運動の後、文学啓蒙運動が盛んになり、発展し続けた。今までの研究では、「啓蒙」を強調する新文学と読者に迎合する通俗文学が、はっきり区別されている。しかし、本論文で述べたように、程小青の作品では読者の好みに迎合する一面もあれば、「啓蒙」の機能もある。彼の探偵小説が当時大変人気があったことからわかるように、当時の市民階層は「啓蒙」を提唱するエリートたちの立場と違い、依然として自身の娯楽や興味を重視する読者であったが、しかし、当時では救国と啓蒙が時代の主流になり、市民階層はこの基本的な時代性から完全に離れることができなかったのである。そのため、当時の市民階層の需要・関心には通俗小説の物語だけでなく、現代社会と民主科学への憧憬も含まれていた。そうであれば、我々は民国時期における市民文化について改めて思考すべきであり、また新文学と通俗文学の関係について、無関係な二つの文学スタイルとして理解してはならないと筆者は考える。この点をも含めて、中国通俗文学及び民国時期における市民文化などに関わる研究にはなお多くの課題が残されているが、それらについては将来の研究に期したい。

参考文献

Frederic Wakeman, Jr. 著 章紅、陳雁、金燕、張曉陽訳 2004 『上海警察, 1927-1937』

上海古籍出版社.

陳独秀 1919 「本誌罪案之答弁書」『新青年』6 (1).

程小青 1932 「灰衣人」『霍桑探案外集』 大衆書局.

37 梁啓超 1902 年「論小説与群治之關係」『新小説』1 (1)。

38 欲新一國之民，不可不先新一國之小説。

- 程小青 1933 「偵探小說的多方面」『霍桑探案（二）』上海文華美術圖書公司。
- 程小青 1942 「舞後的歸宿」『霍桑探案袖珍叢刊（七）』世界書局 13-15.
- 程小青 1942 「催命符」『霍桑探案袖珍叢刊（九）』世界書局 41、61.
- 程小青 1957 「從偵探小說說起」『文匯報』（5月21日）.
- 程小青 1997 「白衣怪」『霍桑探案集4』群眾出版社 125（初出 1942年『霍桑探案袖珍叢刊（八）』世界書局）.
- 程小青 1997 「輪痕与血跡」『霍桑探案集5』群眾出版社 467（初出 1932年『霍桑探案外集』大眾書局）.
- 程小青 1997 「嗣子之死」『霍桑探案集6』群眾出版社 111（初出 1945年『霍桑探案袖珍叢刊（二十五）』世界書局）.
- 程小青 1997 「血手印」『霍桑探案集6』群眾出版社 415、416（初出 1945年『霍桑探案袖珍叢刊（二十七）』世界書局）.
- 范伯群 1999 『中国近現代通俗文学史』江蘇教育出版社。
- 梁啓超 1900 「少年中国說」『清議報』22.
- 梁啓超 1902 「論小說与群治之關係」『新小說』1 (1) 1.
- 陸澹庵 1923 「古塔孤囚」『紅雜誌』2 (65).
- 孫玉声 1918-1919 『黑幕中之黑幕』文明書局。
- 徐念慈 1908 「余之小說觀」『小說林』第9期 7.
- 俞天憤 1926 「白巾禍」『紅玫瑰』2 (30) 17.
- 張碧梧 1921 「双雄鬪智記」『半月』1-12.
- 張慶軍 1997 『民国司法黑幕』江蘇古籍出版社 38.
- 張召奎 1985 『近代出版史概要』山西人民出版社 245.

（神戸大学大学院人文学研究科）